

松尾城跡採集遺物について —令和6年6月の豪雨にともなう崩落土採集遺物の紹介—

滋賀県立大学大学院博士前期過程 宮川 真聖

1. はじめに

指宿市北部の西方に、市指定史跡の松尾城跡という山城がある。松尾城跡は、南北朝時代から江戸時代初頭まで使用された中世山城で、中世を通して数々の戦乱の舞台となった。指宿を治めたものは皆この松尾城を拠点とし、中世を通して指宿の政治の中心となった。

現在でも曲輪や堀などの遺構が良好に残っているが、令和6年6月20日に発生した豪雨により曲輪の一部が崩落し、多数の土器や陶磁器が採集された。本稿では、採集された遺物を紹介し、松尾城跡が使用された時期などについて若干の考察を行う。

2. 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置

指宿市北部の西方に所在する(図1)。錦江湾沿いの標高約35メートルのシラス台地の先端に築かれ、城の東側は絶壁となり海に面する。城の北側には、城域を区切る巨大な堀が走る。堀の北には台地が続き、さらに台地を超えると岩本・今和泉の集落がひろがる。城の西側には、城を区切る堀が南北に走り、そこに国道や鉄道の線路が走る。城の南麓は平地となり、外城市、宮ヶ浜の集落がひろがる。城跡やその周辺には、城ヶ崎、城山、外椿など城に関連する字名が残る。

(2) 城跡の構造

大小13の曲輪からなり、それぞれの曲輪は、深く、かつ垂直な堀によって周囲を囲まれる(図2)。そのため、個々の曲輪の独立性が高い構造となり、村田修三が提唱した「南九州型」の城郭の特徴を有する(村田 1987)。現在、曲輪3・曲輪4・曲輪9などは、宅地開発や鉄道の線路敷設などを受け、曲輪の一部が破壊されるか、あるいは完全に削平されている。ただし、その他の地点に関しては遺構の残りが良く、現在でも堀や土塁、曲輪などが良好に残っている。

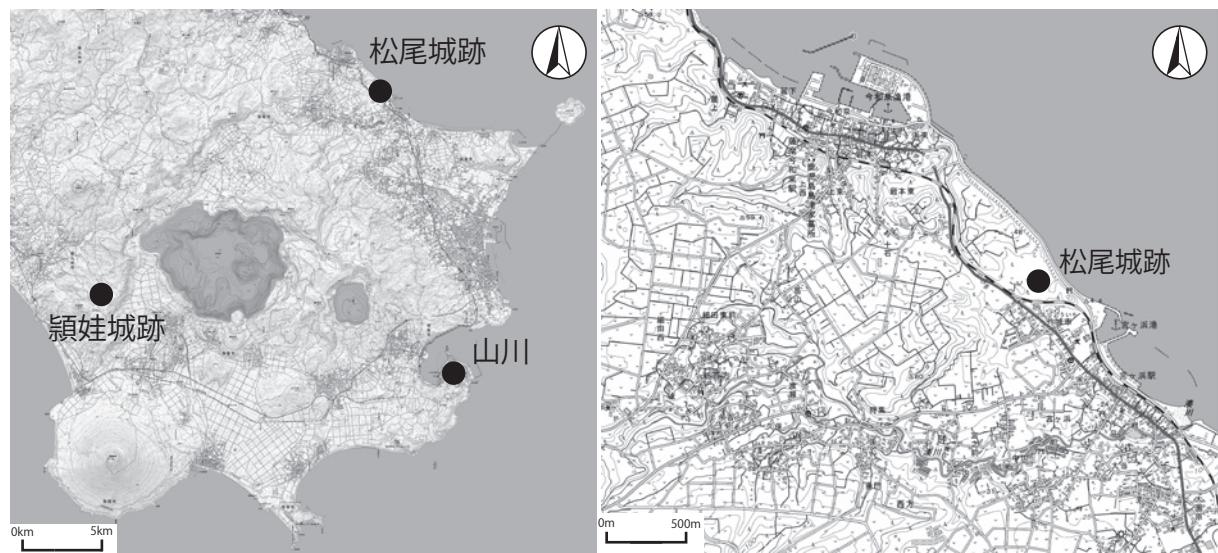


図1 松尾城跡の位置

(3) 松尾城跡の歴史

松尾城跡の歴史について、三木靖による研究がある（三木 2002）。これをもとに、城主の変遷などについて整理する。

中世の指宿には指宿郡が置かれ、鎌倉時代から南北朝時代にかけて、指宿郡司の指宿氏が治めていた。江戸時代の記録には、鎌倉時代の指宿氏二代目忠光が最初の城主とあるが、定かではない。南北朝時代の 14 世紀前半、指宿氏は南朝方として活動し、北朝方の守護島津貞久と敵対した。延元 2 年（1337）から同 3 年（1338）にかけては、指宿郡内でも十数度合戦が起こったといい、この頃に松尾城の築造が開始したと想定されている。

その後、建徳元年（1370）頃まで指宿氏が治めていたが、永徳元年（1381）に大隅国守護島津氏久により、指宿郡が平姓穎娃氏に宛行われると、以降、松尾城の城主は目まぐるしく交替する。応永 10 年（1403）頃には守護領となり、同 18 年（1411）に奈良美作守が入るが、同 25 年（1418）に島津久豊に攻められ敗れると、同 27 年（1420）に伴姓穎娃氏に穎娃が宛行われ、同時に山川と指宿も領した。永享 7 年（1435）には守護島津忠国により「指宿院内奈良弓切八町」が禰寢直清に料所として与えられ、応仁元年（1467）以前には島津忠国の中の喜入頼久に与えられた。その後、文明 6・7 年（1474・1475）には豊州家島津忠康が領していたが、後に再び喜入頼久が回復した。大永 5 年（1525）には、穎娃兼洪が当城を攻め落とし、家臣の津曲兼任が地頭となった。

大永 6 年（1526）に、薩州家島津実久により伊地知重茲が地頭となったが、天文 4 年（1535）には再び穎娃氏領となり、以降、天正 16 年（1588）に本領の穎娃を追放されるまでの約 50 年間、当城は穎娃氏のものとなった。この段階の穎娃氏は、後に島津本宗家を継承し、薩摩・大隅の統一後、九州を席巻した戦国期島津氏と同盟関係となり、後に島津氏の配下となる。

穎娃氏追放後には島津氏領となり、慶長年間（1596～1615）には島津氏家臣の鎌田政近が地頭と

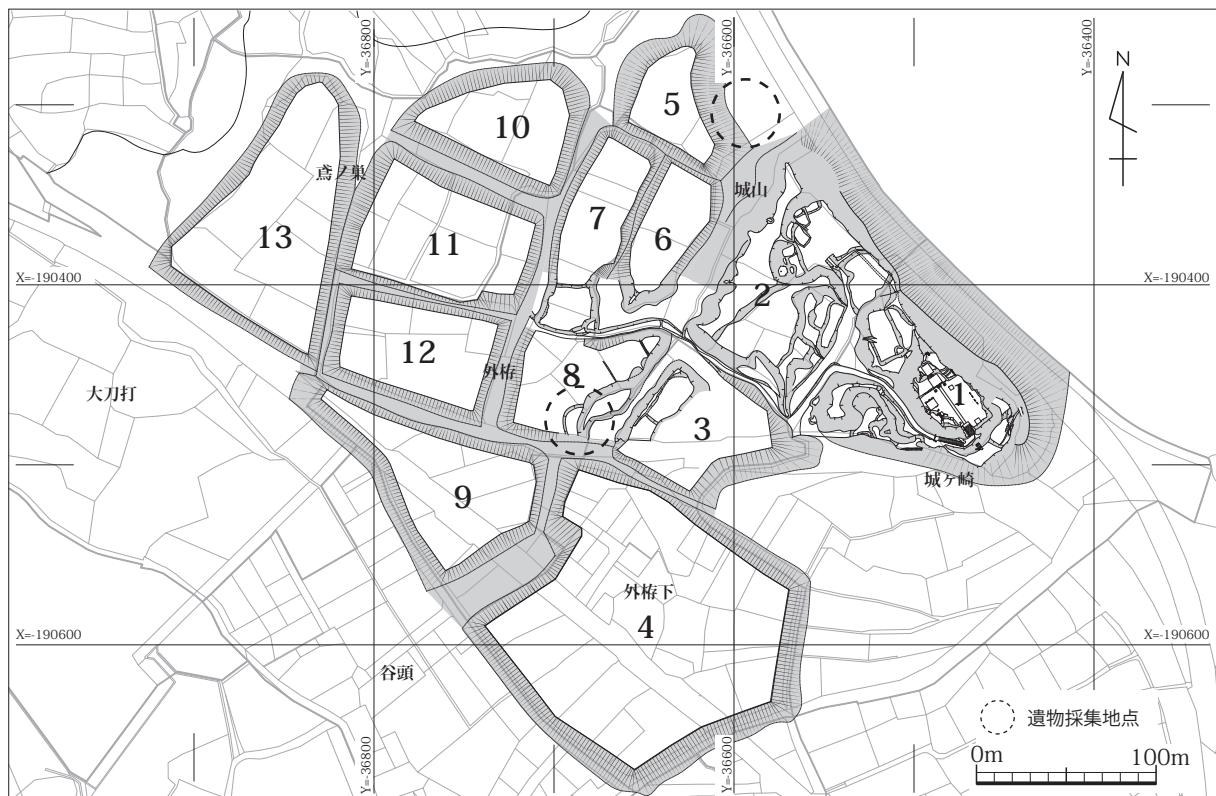


図 2 縄張り図（指宿市教育委員会 2024 に筆者加筆）

なるが、元和の一国一城令（1615）により、廃城となった。

江戸時代には、薩摩藩の外城制度により城の南麓に麓集落が形成され、ここが指宿郷の支配拠点となつた。

（4）既往の調査

平成24年度から平成29年度にかけて指宿市教育委員会によって測量調査が行われ、曲輪1・曲輪2・曲輪3～8の一部の地形図が作成された。

令和5年には、指宿市教育委員会によって現在松尾崎神社が鎮座する曲輪1において確認調査が行われた。この時の調査では遺構や遺物は確認されず、昭和50年代の神社の改築に伴い曲輪が削平され、この時に中世に相当する層が削平を受けたと想定されている（指宿市教育委員会2024）。

3. 採集遺物について（図3～図6）

今回遺物が採集されたのは、曲輪8の南側と曲輪5の北側である（図2）。大半は曲輪5の北側で採集された。

1は曲輪8の南側で採集された土師器の坏である。底部から腰部のみ残存しているが、身の深い环形の形態と思われる。底部切り離し技法はやや不明瞭であるが、ヘラ切りと考えられ、古代の土師器の可能性がある。

2から46は曲輪5の北側で採集された。

2・3は土師器の坏である。

2は内外面にロクロ回転によるナデを施し、見込みに静止ナデを施す。底部切り離し技法は糸切りである。3は底部から腰部のみ残存しているが、体部は外反し、器高の低い形態と思われる。見込みにロクロ回転による精良なナデを施し、色調は白色である。底部切り離し技法は糸切りである。

4・5は龍泉窯系の青磁である。

4は碗で、口縁部が強く外反し、体部外面にはロクロ回転によるヘラ削り痕が明瞭に残る。上田秀夫による分類のD-I類（上田1982）、太宰府分類（太宰府市教育委員会2000）、瀬戸哲也による分類（以下瀬戸分類）のIV類で（瀬戸2010）、太宰府分類では14世紀初頭から後半、瀬戸分類では14世紀中葉から後半に位置付けられる。5は碗の底部である。底部・高台ともに分厚く、高台は角形である。高台内面まで施釉した後に蛇の目釉剥ぎされる。見込みに葉と果実などで構成されるスタンプ紋様が施される。瀬戸分類のV類である。14世紀末から15世紀中葉に位置付けられる。

6～9は白磁の皿である。

6・7は口縁が外反する端反り皿である。8はその底部で、高台の畳付が無釉となり、砂が付着する。いずれも景德鎮窯製で、森田勉による分類のE群である（森田1982）。15世紀後葉から16世紀に位置付けられる。

9は口径12cm程の小型の端反り皿で、黄色を呈する。産地、時期は不明である。

10～27は青花である。

10・11は碗である。外面に草花文が描かれる。呉須の発色が悪くすみ、胎土も灰色系である。これらは16世紀に多く流通した景德鎮窯製の青花に比べ粗製品であり、漳州窯系の青花とされるものである。16世紀後半に位置付けられる。

12・13は景德鎮窯製の碗である。12は口縁部で、外面に草花文が描かれる。13は高台から底部で、細く高い高台を持ち、見込みが緩く盛り上がるいわゆる「饅頭心」形態となる。見込みに牡丹唐草文が描かれ、高台内には年款か吉祥句といった文字が描かれる。小野正敏による分類（以下小野分類）のE群で（小野1982）、16世紀中葉から後半に位置付けられる。

14～16 は碁笥底の皿である。14・15 は外面胴部に芭蕉葉文が描かれる。景德鎮窯製で、小野分類の C 群である。15 世紀後葉から 16 世紀前葉に位置付けられる。16 は口縁部である。外面に波濤文帯が崩れたような文様が描かれる。呉須の発色が悪く、灰色系の胎土である。粗製の青花で、漳州窯系と考えられる。14・15 などの景德鎮窯製品を祖型としたものであろう。

17～27 は皿である（図 4）。

17～22 は口縁部が直行するタイプの皿である。胴部外面に花鳥折枝、口縁部内面に七宝つなぎ文、見込みに山水人物を描き、高台内に「洪武年造」と描かれる。景德鎮窯製で、小野分類の E 群である。16 世紀中葉から後半に位置付けられる。

23 は端反り皿で、口縁内外に圈線、体部内面に二重圈線が入る。黄白色の胎土で、粗製の青花である。漳州窯系と考えられる。

24 は大型の皿の腰部で、口縁が直行するタイプである。外面に花唐草文が描かれる。

25～27 は大型の皿の腰部で、口縁が外反するいわゆる「ツバ皿」のタイプと考えられる。外面に鎬文が彫られる。いずれも呉須の発色が悪く、25 は黄白色の胎土である。粗製のタイプである。16 世紀後半に位置付けられる。

28～46 は瓦質土器、陶器類である（図 5・図 6）。

28 は瓦質土器の摺鉢で、底部から腰部が残る。一单位 8 条の摺り目が入る。在地生産品であろう。

29～31 は備前焼である。29・30 は摺鉢である。29 は体部で、摺り目の上端部が残る。赤褐色の胎土で、1mm 程の砂粒を含む。30 は底部から腰部である。外面が褐色、内面が灰色を呈する。赤褐色の胎土で、1mm 程の砂粒を含む。内外面ともに凹凸が激しく、数状の稜線が入る。31 は壺もしくは甕の体部である。外面は小豆色を呈する。褐色の胎土で 3～5mm 程の砂粒を多量に含み、粘土質の胎土である。内外面に工具によるナデの痕跡が明瞭に残る。

32～35 はタイ産陶器の四耳壺で、メナムノイ窯産である。いずれも肩部から胴部である。固く焼き締まり、無釉となる。外面は赤褐色を呈し、黄白色の化粧土が縞状にかかる。褐色の胎土で、2～3mm 程の白色・褐色の砂粒を含む。16 世紀後半のもので、無頸のタイプのものと考えられる¹⁾。4 つの破片は同一個体の可能性がある。

36・37 は壺か甕の体部である。内外面ともに緑色の釉がかかる。胎土は灰色で締まりが強く、磁器質である。1mm 程の白色・黒色の砂粒を含む。36 は内外面に数状の凹線・凸線が入る。37 は湾曲する体部である。36・37 は同一個体の可能性がある。

38 は壺もしくは甕の体部である。外面に茶褐色の釉がかかり、内面には灰白色の釉がかかる。灰色の胎土で混入物が少ない。内外面ともに凹凸があり、数状の稜線が入る。

39 は壺もしくは甕の体部である。外面は黄褐色となり、釉が縞状にかかる。内面は全体に釉がかかり、白色を呈する。灰色の胎土で締まりが強く、2mm 程の白色・黒色の砂粒を含む。内面に同心円状の当て具痕が残る。

40 は壺もしくは甕の体部である。外面に黒色の釉がかかり、内面には黒褐色の釉がかかる。1mm 程の白い小石を多く含み、胎土は外側が黒褐色、内側が赤褐色となっている。

41 は壺もしくは甕の体部である。内外面ともに無釉で、固く焼き締められる。赤褐色の胎土で、2～3mm 程の白色・褐色の粒子を多く含み、また石英を含む。内外面ともに工具によるナデの痕跡が残る。

42 は壺の肩部である。内外面に褐色の釉がかかる。灰色の胎土で、1mm 程の赤褐色の砂粒を僅かに含む。内外面は凹凸が激しく、数状の稜線が入る。横方向に無釉となる箇所を確認でき、重ね焼きにより釉が禿げたものと考えられる。中国産の褐釉壺で、福建省磁竈窯産の可能性がある²⁾。

43～46 は摺鉢である（図 6）。内外面ともに無釉で固く焼き締められ、器面は黒色を呈する。黒褐色の胎土で、2～3mm 程の白色の砂粒を多量に含む。43・44 は口縁部から体部である。体部はやや

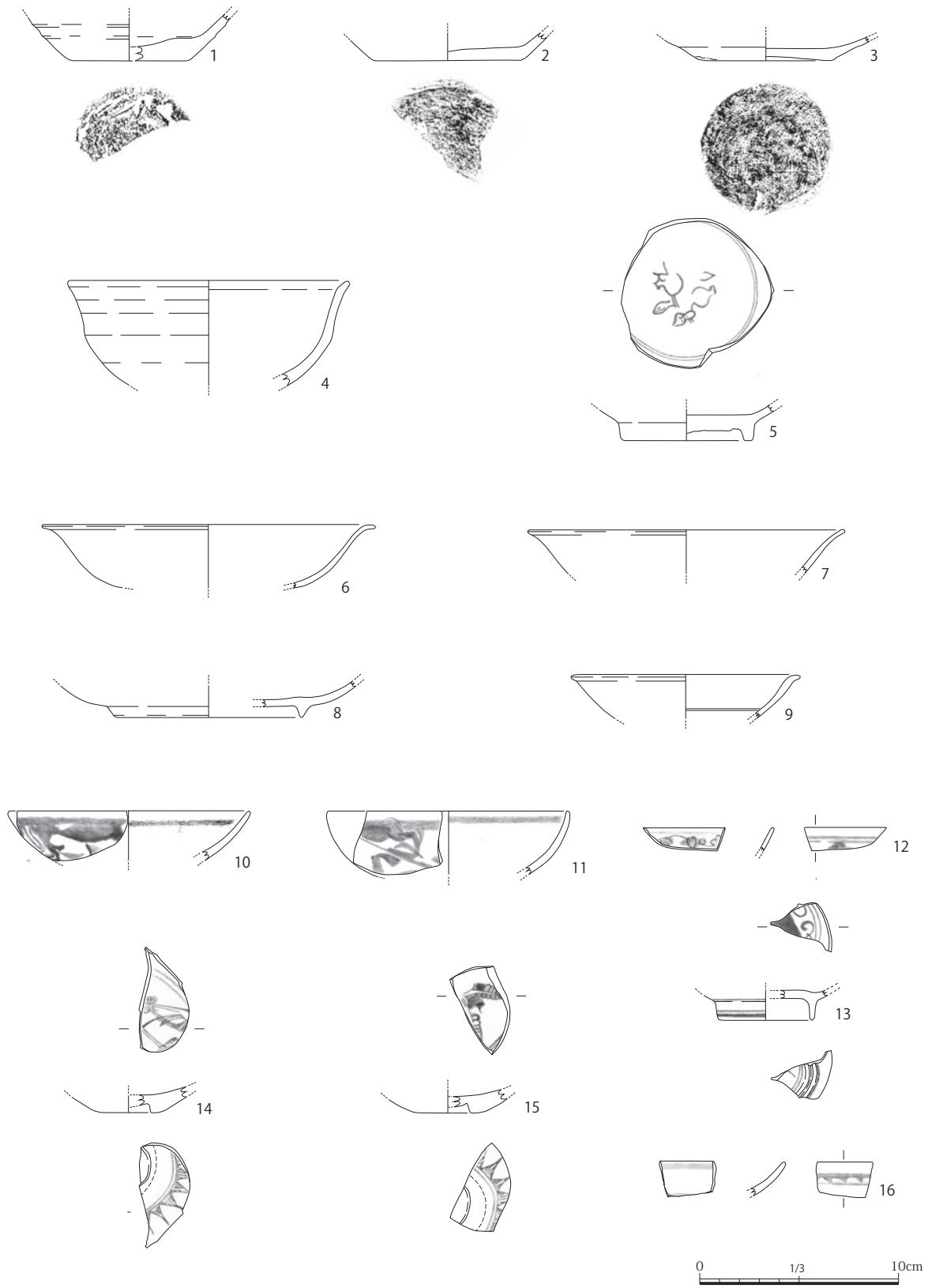


図3 実測図①

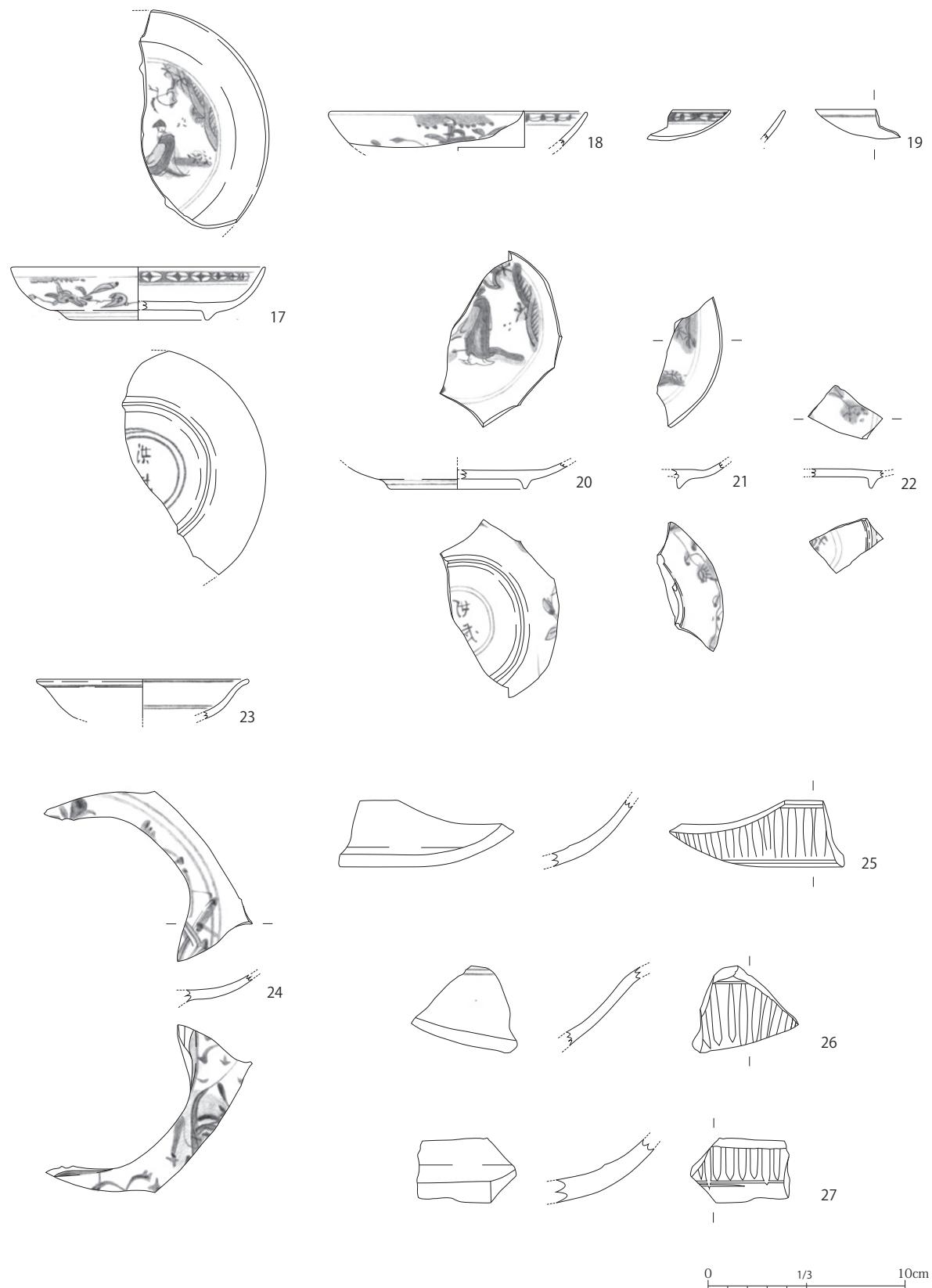


図4 実測図②

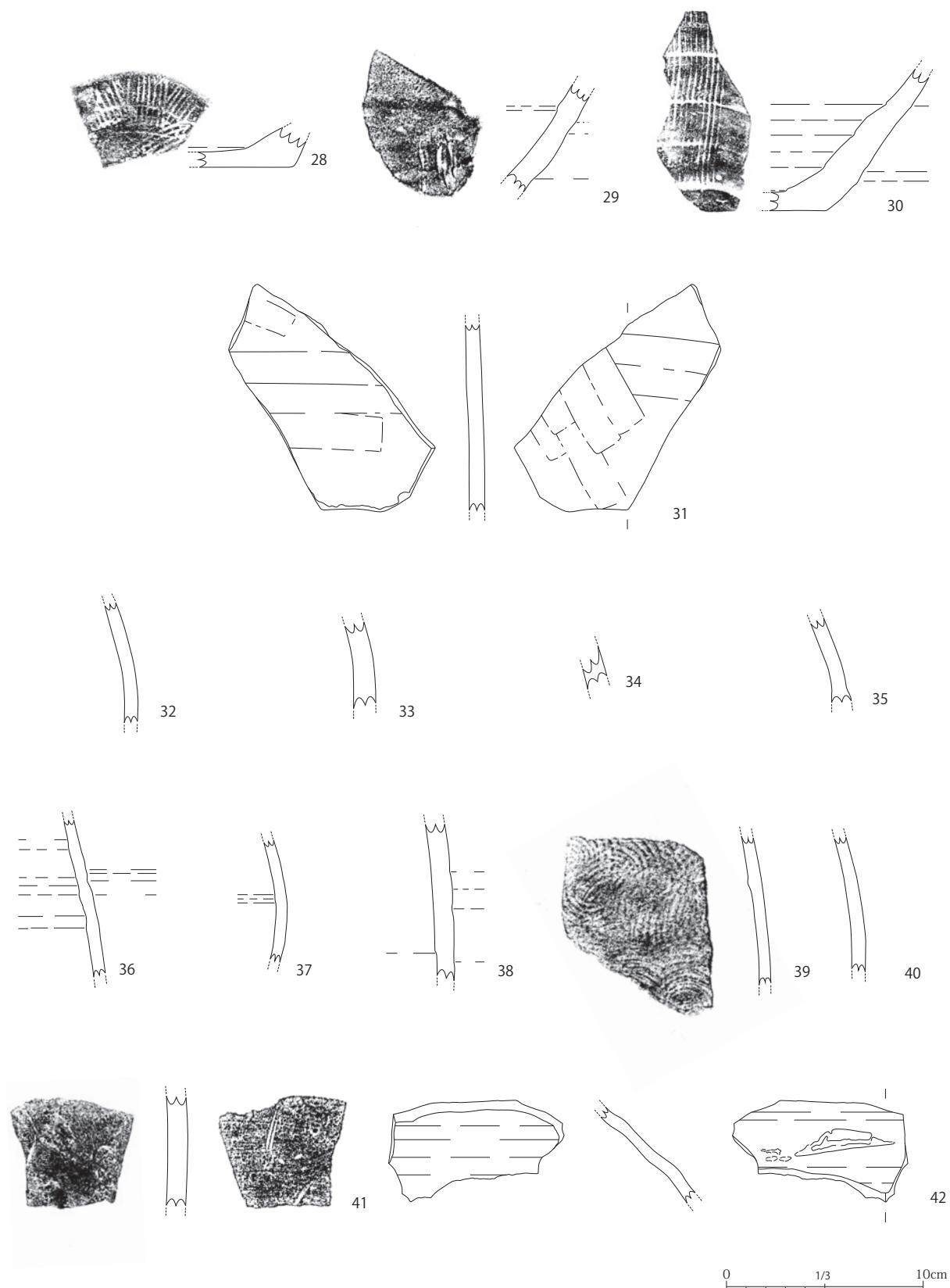


図5 実測図③

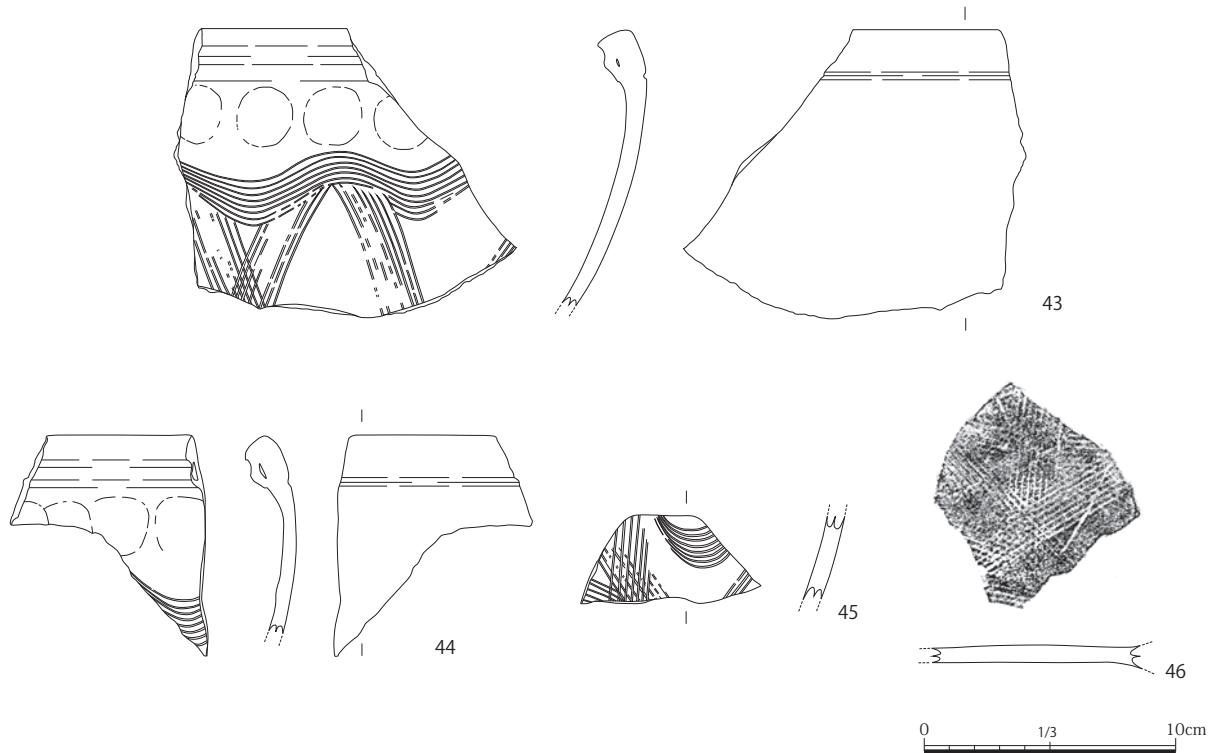


図6 実測図④

内湾し、口縁部は内側に折り曲げられ突帯状になる。体部内外面ともに磨滅が激しいが、外面には叩き痕が残り、内面の突帯直下には明瞭な指押さえ痕が残る。体部の内面上部に摺り目による波状文が施され、下部に摺り目が入る。摺り目は磨滅が激しい。45は体部で、波状文・摺り目が入る。46は底部と考えられる。やや上げ底状になり、多数の摺り目が縦横に交差する。43～46は同一個体の可能性がある。

4. 考察

(1) 遺物の組成

採集遺物には、機能と生産地に相関関係が認められる。すなわち、碗や皿といった食膳具は在地生産品である土師器と青磁・白磁・青花といった貿易陶磁器、調理具である摺鉢は在地生産品である瓦質土器と国産の備前焼、壺や甕といった貯蔵具は国産の備前焼とタイや中国産の貿易陶磁器が構成する。このような遺物の組成は南九州の中世山城で一般的に見られる土器・陶磁器組成と同様の傾向を示す（岩元 2019）。

(2) 遺物の時期

今回採集された土器・陶磁器は大半が中世後半の14世紀から16世紀に属するものであった。ただし、その中でも中心となる時期を見出すことができる。

中世後半における陶磁器食膳具について、小野正敏は4期に区分し、各期の組成を明らかにしている（小野 1985）。その後、續伸一郎により整理された（續 2022・図7）。これによると、I期（15世紀前葉～15世紀後葉）は碗・皿ともに青磁が中心となり、白磁の小坏（森田D群）や青花の端反り碗（小野B群）が加わる。II期（15世紀後葉～16世紀前葉）は青磁の線描蓮弁文碗（上田B-IV類）や白磁端反り皿（森田E群）、青花の蓮子碗（小野碗C群）・碁笥底の皿（小野皿C群）・端反り皿（小野皿B1群）などで構成される。II期以降、陶磁器食膳具の中心を青花が占めるようになる。III期（16世紀後葉）

はII期に見られた青花に新たに饅頭心碗（小野碗E群）や口縁直行の皿（小野皿E群）が加わり、青磁が減少する。IV期（天正年間後半頃～17世紀初頭）は畳付けが露胎となり砂が付着する青花碗・皿（小野碗F群・小野皿F群）が構成する。

採集された遺物は、I期からIII期までと幅広い時期に属する。しかし、青磁が少なく青花が主体を占める点から、16世紀を中心とした遺物群であると言える。さらに、その中でも青花皿E群・青花碗E群・青花のツバ皿・漳州窯系の碗や皿を多く確認できることから、III期までを主体とする遺物群であるといえる。

ただし、今回検討した資料は採集遺物であり、発掘調査による出土遺物ではない。そのため、他の遺跡において発掘調査で出土した資料と同様に扱い、比較することには慎重な態度が必要である。さらに、ここで述べた遺物の時期はあくまで採集遺物のものであり、松尾城跡総体の特徴として結論付けるわけではないことも強調しておく。

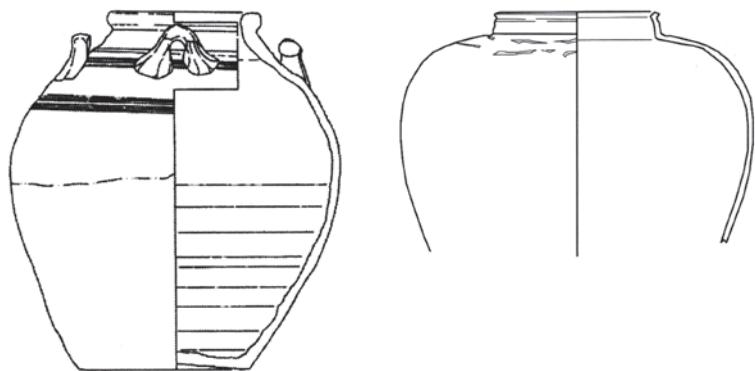
（3）海外産の貯蔵具について

採集遺物の中には、32～35のようなタイ産の四耳壺や42のような中国産の壺など、海外産の貯蔵具がある。

こうした海外産の貯蔵具のうち、特に東南アジア産陶磁器について、日本国内での出土背景が考察されている。森本朝子は、日本出土の東南アジア産陶磁器を4期に分けて考察している。このうちI期からIII期までが中世後半に相当するが、I期（14世紀中頃から15世紀中頃）は北部九州に出土が集中し、明の海禁政策下、博多商人に勝るとも劣らない活動を行なった倭寇、もしくは壱岐・対馬商人の関与が想定されている。II期（15世紀中頃から16世紀中頃）は沖縄での出土が顕著で、明の海禁政策下に中継貿易に従事した琉球王国に、東南アジア産陶磁器が流入したという。III期（16世紀中頃から17世紀初頭）になると、堺や大坂など西日本に分布の中心が移り、特に堺や豊後の大友府内町跡など南蛮貿易に関わる遺跡での出土が顕著に認められるようになる（森本2000）。

また、こうした海外産の貯蔵具は、輸出物資の運搬容器（コンテナ）としての性格が想定されている（續1990）。一方で、城館跡からの出土も認められ、「コンテナ陶磁」が城主への献上品となった可能性が想定されている（續2023）。

今回紹介した海外産の貯蔵具は、採集品であり実年代は不明である。しかし、その他に採集された遺物の多くは16世紀代のものであり、特に16世紀後半以降のものを多く確認できることから、共に採集された海外産の貯蔵具についても同じ時期に属する可能性がある。堺環濠都市遺跡では、16世紀後半の土坑から無頸で体部外面に白色の化粧土がかかるメナムノイ窯産の四耳壺が出土している（堺市教育委員会1989・図8）。また、肩部外面に重ね焼き痕が残る中国産褐釉壺は、堺や大友府内町跡など16世紀後半を中心とする遺跡からの出土が報告されている（大分県教育委員会2005・図8）。これらのことからも、今回採集された海外産貯蔵具は16世紀代のものであり、中でも16世紀後半に属する可能性がある。



メナムノイ窯産無頸四耳壺

堺環濠都市遺跡
(堺市教育委員会 1989 より引用)

中国産褐釉壺

大友府内町跡
(大分県教育庁埋蔵文化財センター 2005 より引用)

図8 南蛮貿易に関する海外産貯蔵具

堺や大友府内町跡などで出土したメナムノイ窯産無頸四耳壺・中国産褐釉壺は南蛮貿易によりもたらされたものとされ、商品である内容物を運搬する「コンテナ陶磁」としての性格が想定されている（續 2023）。松尾城跡で採集された同種の海外産貯蔵具についても、南蛮貿易の関連を想定すべきではないかと考える。16世紀後半段階、指宿を治めていた穎姓氏は、同時に指宿の南方に位置する山川も領していた。山川は、16世紀中頃から南蛮船が来航する国

際貿易港で、天文 16 年（1547）・永禄 4 年（1561）などにポルトガル船が来航した記録がある（岸野 1989・鹿毛 2023）。特に天文 16 年の来航は、ポルトガル人ジョルジュ・アルバレスによる山川滞在中の記録である『日本報告』が著されたことでも有名である。天正 11 年（1583）には、鹿児島の島津氏により拠点港として定められ、中国船や南蛮船が来航する国際港・自由貿易港として保護する施策が指宿地頭の穎姓氏を通して採られている（徳永 2010）。こうしたことからも、当時の山川には多数の南蛮船が来航し、中国南部や東南アジア産の陶磁器がもたらされたものと考える。そして、この山川から当時の指宿における支配拠点であった松尾城にそれらの陶磁器がもたらされたのではないだろうか。

ただし、これまで山川における大規模な発掘調査の事例は無く、東南アジアや中国南部の貯蔵具が発掘された事例は無い。そのため、ここで述べた松尾城跡と山川との関連については、あくまで可能性に留めておく必要がある。

5. おわりに

採集遺物を検討した結果、在地生産品である土師器や貿易陶磁器である青磁や白磁、青花など様々な遺物があり、その組成は南九州の山城における一般的な土器・陶磁器組成と同様の傾向を示すことが分かった。また、遺物の時期は 14 世紀から 16 世紀までと幅広いが、中でも 16 世紀後半の遺物が多数あることが判明した。採集遺物の中には海外産の貯蔵具があり、遺物の時期などから南蛮船が来航する国際貿易港である山川を通してもたらされたものと推定した。

ただし、今回検討した資料はあくまで採集遺物であり、発掘調査による出土資料ではないということは改めて留意しておかなければならない。そのため、ここで述べたことはあくまで松尾城跡の一端についてであり、今後、松尾城跡、及び周辺遺跡の発掘調査や、さらなる調査・研究によって検証していくことが必要である。

これまで、松尾城跡における発掘調査はほとんどなく、遺物からの検討は不可能であった。さらに言えば、指宿で中世の遺跡が発掘された事例は少なく、中世の指宿の様相を考古学の面から明らかにすることは極めて難しかった。こうした中で、遺跡の一部が崩落するという痛ましい出来事の結果ではあるが、採集した遺物の検討から、松尾城跡、ひいては中世の指宿の一端を考古学の面から明らかにすることができたと思う。

今回は出土遺物の面から検討を行った。しかし、現在も現地には遺構が良好に残っており、今後はこうした城郭遺構も含めた松尾城跡総体の検討を行っていく必要がある。

謝辞

陶磁器類の同定に際し、續伸一郎氏よりご教示いただきました。陶磁器類の同定や遺物の実測・写真撮影、文章の執筆などについて、指導教官の佐藤亜聖先生よりご指導・ご教授をいただきました。また、指宿市教育委員会より、遺物の実見・実測、および本稿の執筆の機会をご提供いただきました。心より感謝申し上げます。

註

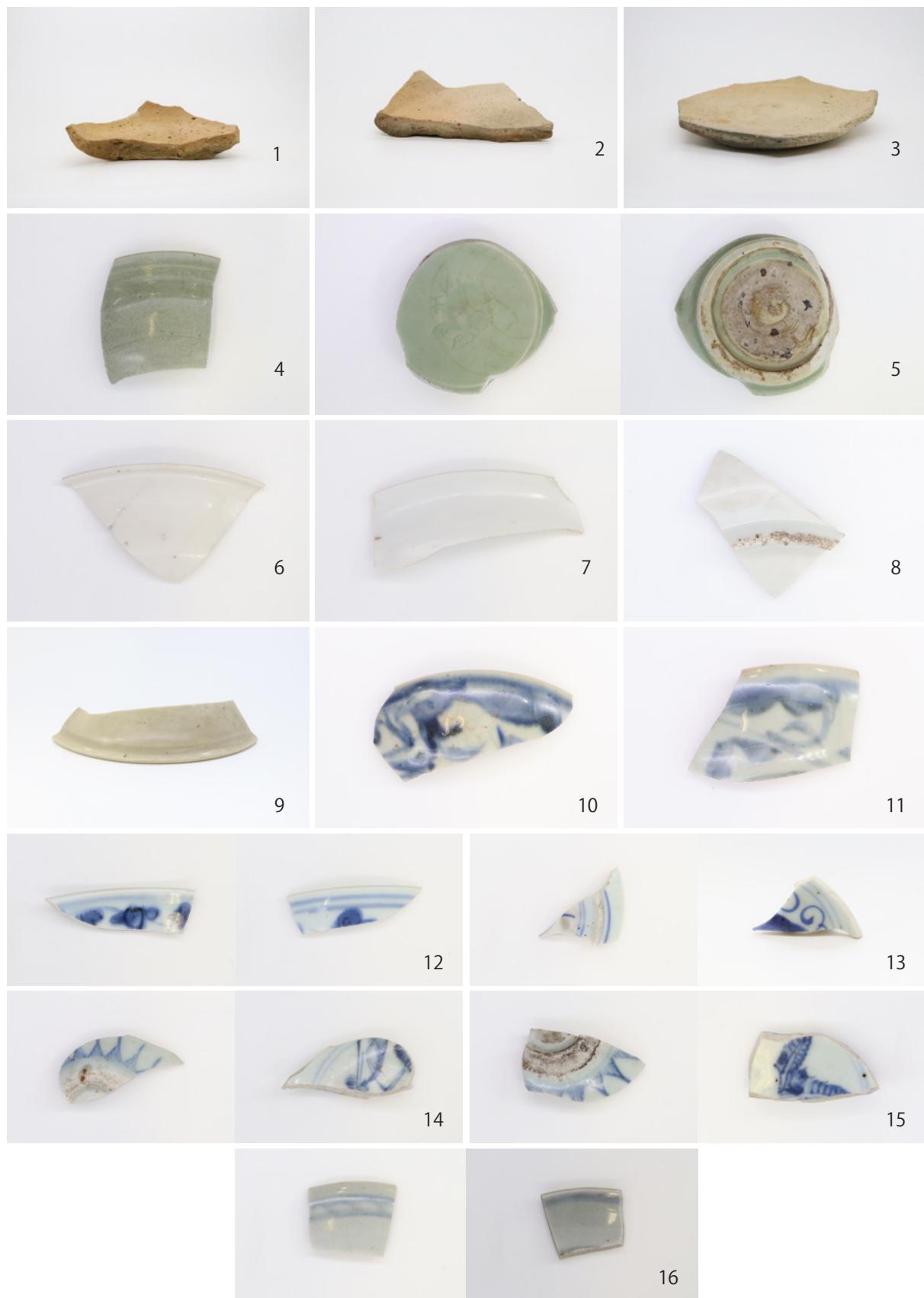
- 1) 16世紀後半のメナムノイ窯産無頬四耳壺は肩部から体部にかけて白色の化粧土がかかり無釉になるといい、このタイプの可能性がある（堺市文化財課の續伸一郎氏のご教示による。）。
- 2) 焼成の際、壺の肩部に鉢の口を重ねて焼く際にできる痕跡であり、こうしたタイプのものは、福建省磁窯産の可能性があるという（堺市文化財課の續伸一郎氏のご教示による。）。

参考文献

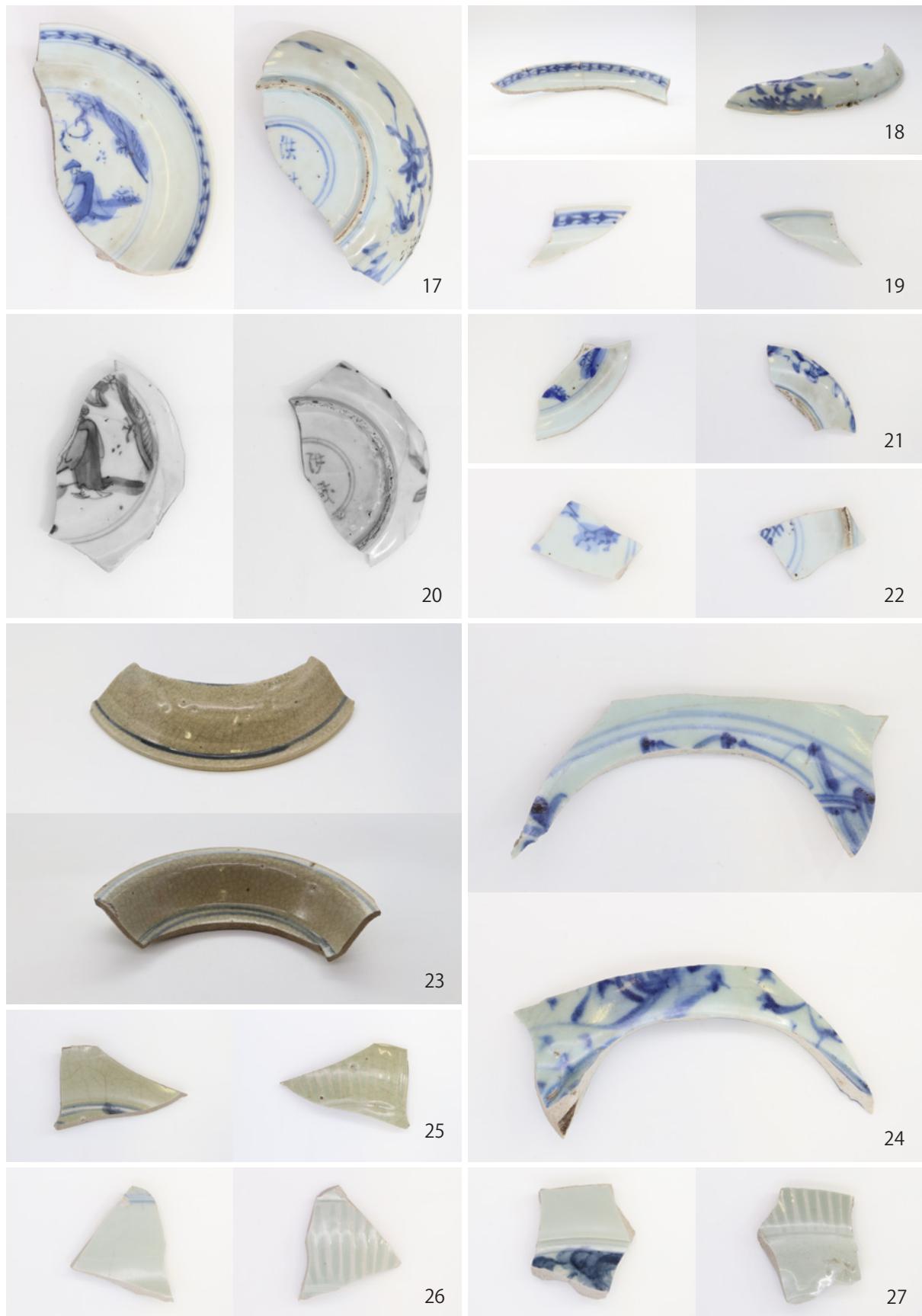
- 指宿市教育委員会 2024『令和5年度市内遺跡発掘調査報告書（敷領遺跡・松尾城跡・五郎ヶ岡遺跡）』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（71）
- 岩元康成 2019『国産陶器・土器と貿易陶磁器』『第40回日本貿易陶磁研究会集会 南九州から奄美群島の貿易陶磁発表要旨・資料集』日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1982「14世紀～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』（2） 日本貿易陶磁研究会
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2005『豊後府内』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告（1）
- 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』（2） 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985「出土陶磁よりみた十五、十六世紀における画期の素描」『MUSEUM』（46） 東京国立博物館
- 鹿毛敏夫 2023『世界史の中の戦国大名』講談社
- 岸野久 1989『西欧人の日本発見』吉川弘文館
- 堺市教育委員会 1989『堺環濠都市遺跡発掘調査報告書 SKT202 地点 堀市車之町西1丁6番堺環濠都市遺跡発掘調査報告書 SKT169 地点堺市新在家町東1丁11-1, 2』堺市文化財調査報告（49）
- 瀬戸哲也 2010「沖縄における12～16世紀の貿易陶磁—中国産陶磁を中心とした様相と組成—」『貿易陶磁研究』（30） 日本貿易陶磁研究会
- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化（49）
- 續伸一郎 1990「堺環濠都市遺跡出土の貿易陶磁（1）一出土陶器の分類を中心として—」『貿易陶磁研究』（10） 日本貿易陶磁研究会
- 續伸一郎 2022「中世後期の貿易陶磁器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 續伸一郎 2023「堺環濠都市遺跡から出土した貿易陶磁器—「琉球貿易」、「南蛮貿易」を中心として—」『貿易陶磁研究』（43） 日本貿易陶磁研究会
- 徳永和喜 2010「戦国期から江戸初期の島津氏外交」『黎明館調査研究報告』（23）鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 三木靖 2002「薩摩国の中世城郭研究 III」『鹿児島国際大学短期大学部研究紀要』（69）鹿児島国際大学短期大学部研究紀要刊行委員会
- 村田修三 1987「城の分布」『図説中世城郭事典』（3）新人物往来社
- 森田勉 1982「14～16世紀の白磁と型式分類と編年」『貿易陶磁研究』（2）日本貿易陶磁研究会
- 森本朝子 2000「日本出土の東南アジア産陶磁の様相」『貿易陶磁研究』（20）日本貿易陶磁研究会

表 1 採集遺物観察表

| 挿図 No | 掲載 No | 種別 | 器種 | 部位 | 法量 (cm) | | | 色調 | | 調整 | | 型式 | 年代 | 備考 |
|----------|----------|------|-----|--------|---------|-----|-----|----------|----------|-----|-----|----------|---------------|-----------|
| | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 図 3 | 1 | 土師器 | 壺 | 底部～腰部 | — | — | 5.9 | 7.5YR7/6 | 7.5YR7/6 | ナデ | ナデ | — | — | ヘラ切り? |
| | 2 | 土師器 | 壺 | 底部 | — | — | 7.2 | 7.5YR6/4 | 7.5YR8/2 | ナデ | ナデ | — | — | 糸切り |
| | 3 | 土師器 | 壺 | 底部 | — | — | 6.5 | 10YR8/2 | 10YR7/2 | ナデ | ナデ | — | — | 糸切り |
| | 4 | 青磁 | 碗 | 体部～口縁部 | 14.0 | — | — | 2.5GY7/1 | 2.5GY7/1 | — | — | 瀬戸 IV 類 | 14c 中葉～後半 | 龍泉窯系 |
| | 5 | 青磁 | 碗 | 底部 | — | — | 6.3 | 10GY7/1 | 10GY7/1 | — | — | 瀬戸 V 類 | 14c 末～15c 中葉 | 龍泉窯系 |
| | 6 | 白磁 | 皿 | 体部～口縁部 | 16.7 | — | — | N8/ | N8/ | — | — | 森田 E2 | 15c 後葉～16c | 景德鎮窯製 |
| | 7 | 白磁 | 皿 | 体部～口縁部 | 15.9 | — | — | N8/ | N8/ | — | — | 森田 E2 | 15c 後葉～16c | 景德鎮窯製 |
| | 8 | 白磁 | 皿 | 底部 | — | — | 9.3 | N8/ | N8/ | — | — | 森田 E2 | 15c 後葉～16c | 景德鎮窯製 |
| | 9 | 白磁 | 皿 | 体部～口縁部 | 11.2 | — | — | 7.5Y7/2 | 7.5Y7/2 | — | — | — | — | — |
| | 10 | 青花 | 碗 | 体部～口縁部 | 12.0 | — | — | 2.5GY8/1 | 2.5GY8/1 | — | — | — | 16c 後半 | 漳州窯系 |
| | 11 | 青花 | 碗 | 体部～口縁部 | 12.0 | — | — | 7.5GY8/1 | 7.5GY8/1 | — | — | — | 16c 後半 | 漳州窯系 |
| | 12 | 青花 | 碗 | 口縁部 | — | — | — | N8/ | N8/ | — | — | — | — | 景德鎮窯製 |
| | 13 | 青花 | 碗 | 底部 | — | — | 4.7 | N8/ | N8/ | — | — | 小野 E 群 | 16c 中頃～後半 | 景德鎮窯製 |
| | 14 | 青花 | 皿 | 底部 | — | — | 2.8 | N8/ | N8/ | — | — | 小野 C 群 | 15c 後葉～16c 前葉 | 景德鎮窯製 |
| | 15 | 青花 | 皿 | 底部 | — | — | 2.6 | N8/ | N8/ | — | — | 小野 C 群 | 15c 後葉～16c 前葉 | 景德鎮窯製 |
| | 16 | 青花 | 皿 | 口縁部 | — | — | — | 2.5GY7/1 | 2.5GY7/1 | — | — | 小野 C 群粗製 | 16c 後半 | 漳州窯系 |
| 図 4 | 17 | 青花 | 皿 | 底部～体部 | 12.8 | 2.7 | 6.9 | N8/ | N8/ | — | — | 小野 E 群 | 16c 中頃～後半 | 景德鎮窯製 |
| | 18 | 青花 | 皿 | 体部～口縁部 | 13.0 | — | — | N8/ | N8/ | — | — | 小野 E 群 | 16c 中頃～後半 | 景德鎮窯製 |
| | 19 | 青花 | 皿 | 口縁部 | — | — | — | N8/ | N8/ | — | — | 小野 E 群 | 16c 中頃～後半 | 景德鎮窯製 |
| | 20 | 青花 | 皿 | 底部 | — | — | 6.8 | N8/ | N8/ | — | — | 小野 E 群 | 16c 中頃～後半 | 景德鎮窯製 |
| | 21 | 青花 | 皿 | 底部 | — | — | — | N8/ | N8/ | — | — | 小野 E 群 | 16c 中頃～後半 | 景德鎮窯製 |
| | 22 | 青花 | 皿 | 底部 | — | — | — | N8/ | N8/ | — | — | 小野 E 群 | 16c 中頃～後半 | 景德鎮窯製 |
| | 23 | 青花 | 皿 | 体部～口縁部 | 10.7 | — | — | 7.5Y7/2 | 7.5Y7/2 | — | — | — | 16c 後半 | 漳州窯系 |
| | 24 | 青花 | 皿 | 底部～腰部 | — | — | — | 7.5GY8/1 | 7.5GY8/1 | — | — | — | — | — |
| | 25 | 青花 | 皿 | 腰部 | — | — | — | 10Y7/2 | 10Y7/2 | — | — | — | 16c 後半 | ツバ皿, 漳州窯系 |
| | 26 | 青花 | 皿 | 腰部 | — | — | — | 5GY7/1 | 5GY7/1 | — | — | — | 16c 後半 | ツバ皿 |
| | 27 | 青花 | 皿 | 腰部 | — | — | — | 5GY7/1 | 5GY7/1 | — | — | — | 16c 後半 | ツバ皿 |
| 図 5 | 28 | 瓦質土器 | 擂鉢 | 底部 | — | — | — | 2.5Y7/2 | 5Y7/1 | — | — | — | — | — |
| | 29 | 陶器 | 擂鉢 | 体部 | — | — | — | 10YR5/2 | 2.5Y4/1 | — | — | — | — | 備前焼 |
| | 30 | 陶器 | 擂鉢 | 底部～体部 | — | — | — | 10YR4/1 | N6/ | — | — | — | — | 備前焼 |
| | 31 | 陶器 | 壺か甕 | 体部 | — | — | — | 5YR3/3 | 7.5YR5/2 | ナデ | ナデ | — | — | 備前焼 |
| | 32 | 陶器 | 壺 | 体部 | — | — | — | 10YR5/4 | 10YR5/2 | — | — | — | — | メナムノイ窯 |
| | 33 | 陶器 | 壺 | 体部 | — | — | — | 5YR3/6 | 10YR5/2 | — | — | — | — | メナムノイ窯 |
| | 34 | 陶器 | 壺 | 体部 | — | — | — | 5YR3/2 | 10YR5/2 | — | — | — | — | メナムノイ窯 |
| | 35 | 陶器 | 壺 | 体部 | — | — | — | 2.5Y8/3 | 7.5YR5/2 | — | — | — | — | メナムノイ窯 |
| | 36 | 陶器 | 壺か甕 | 体部 | — | — | — | 5Y4/3 | 5Y4/3 | — | — | — | — | — |
| | 37 | 陶器 | 壺か甕 | 体部 | — | — | — | 5Y4/3 | 5Y4/3 | — | — | — | — | — |
| | 38 | 陶器 | 壺か甕 | 体部 | — | — | — | 2.5Y3/3 | 2.5Y7/2 | — | — | — | — | — |
| | 39 | 陶器 | 壺か甕 | 体部 | — | — | — | 10YR6/4 | 2.5Y8/1 | — | — | — | — | 内面當て具痕 |
| | 40 | 陶器 | 壺か甕 | 体部 | — | — | — | 2.5Y2/1 | 10YR4/1 | — | — | — | — | — |
| | 41 | 陶器 | 壺か甕 | 体部 | — | — | — | 5YR5/2 | 7.5YR5/2 | ナデ | ナデ | — | — | — |
| | 42 | 陶器 | 壺 | 肩部 | — | — | — | 10YR5/4 | 10YR5/3 | — | — | — | — | 磁竈窯か |
| 図 6 | 43 | 陶器 | 擂鉢 | 体部～口縁部 | — | — | — | 7.5Y4/1 | 10Y4/1 | タタキ | 指捺え | — | — | — |
| | 44 | 陶器 | 擂鉢 | 体部～口縁部 | — | — | — | 7.5Y4/1 | 10Y4/1 | タタキ | 指捺え | — | — | — |
| | 45 | 陶器 | 擂鉢 | 体部 | — | — | — | 10Y5/1 | 10Y5/1 | タタキ | — | — | — | — |
| | 46 | 陶器 | 擂鉢 | 底部 | — | — | — | 7.5Y4/1 | 7.5Y6/1 | — | — | — | — | — |



写真図版1



写真図版 2



写真図版3



写真図版 4